

くまのじんじゃ  
熊野神社の大イチョウ

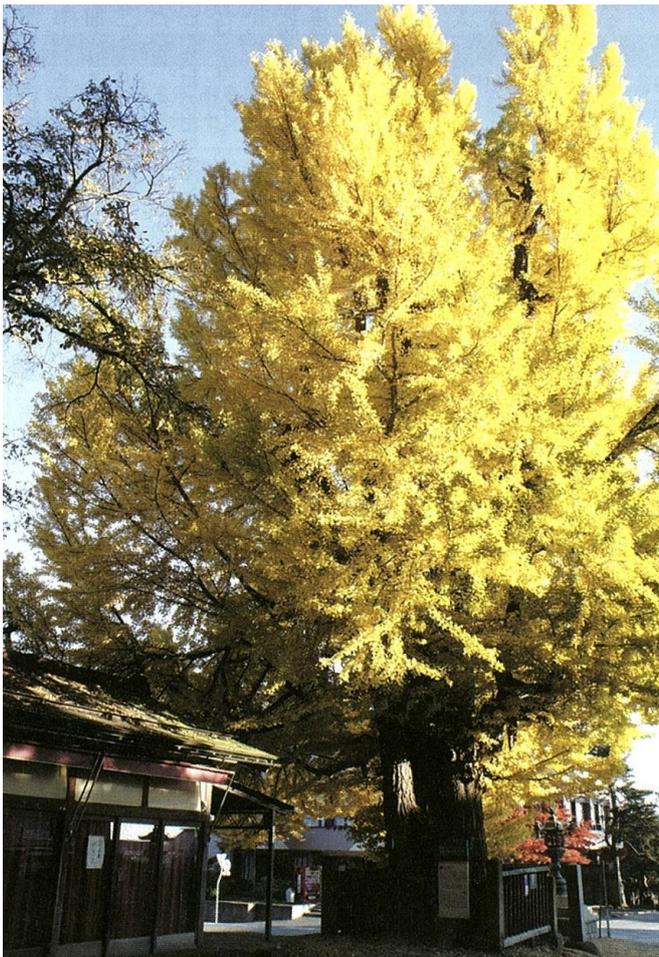
県指定天然記念物

宮内にある熊野大社は、数十段の石段を上った小高い丘の上にあります。境内にはスギやケヤキ、ハルニレ、ユキツバキなどの大樹木が伸び、神域としての雰囲気を感じさせます。中でも、入口右側にある大イチョウは、県内有数の巨木で昭和 31（1956）年 11 月 24 日に、県指定文化財（天然記念物）になりました。

この大イチョウは、根回り約 7.7m で、主幹は落雷に遭遇したのか約 10m のところで失われていますが、地上 2m ばかり上から多数の大枝が分かれて生い茂り、その側枝が直上し高さ約 30m となって伸びているのです。

また、手前の太い枝には、でんぷんを貯えるといわれるこん棒状の乳柱がぶら下がっています。このようになったイチョウを乳銀杏ちちいちょうといい、数百年を経たイチョウでなければこの現象は見られないといわれています。

これを裏付けるように大イチョウは、源義家が後三年の役（1083 年～1087 年、平安時代後期）



での勝利の御礼に紀州熊野三所神を再びかんじょう勧請した際、家臣の鎌倉権五郎景政に命じて植えさせたものと伝えられていることから、樹齢は 800 年以上に及ぶのではと推定されているのです。

イチョウは雌雄異株（雌雄が株ごとに完全分かれていること）の樹木です。熊野神社の大イチョウは雄株のため、種子を結実することはありませんが、秋には葉が鮮やかな黄色に染まりとても見事です。この葉が全部落ちると根雪になるなどの話もあり、地域の風物詩としても親しまれています。

南陽市文化財保護審議委員 山口吉子  
平成 26 年 11 月 1 日号 市報なんよう掲載